



埼玉県のマスコット コハトン

ラ イ ブ ・ レ タ ー

Lib. Letter

2010 Autumn [9～11月]季刊

平成22年9月15日 通巻 第21号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

忍城 水攻め

—『のぼうの城』の周辺—

『のぼうの城』で有名になった忍城（おしじょう）の攻防戦は、豊臣秀吉の小田原城攻略に伴ったものですが、事実上、天下統一に向けた最後の戦であったと言えます。この戦で、秀吉は表立って敵対する勢力をほぼ平らげ、時代の覇者へと上りつめることになりました。

その忍城攻防戦は、攻め手の圧倒的な戦力的優位にもかかわらず、守備側の頑強な抵抗によって落城を拒まれ、秀吉側にとって苦い戦となりました。豊臣方総司令官の石田三成は高松城を遙かに上回る大規模な堤を築いて壮大な水攻めを試みますが、それでも籠城方の士気を挫くことはできず、戦局膠着のまま、主城の小田原城の降伏後まで忍城はついに陥落しませんでした。

この忍城攻防戦は、敗れたとはいえ圧倒的劣勢でも抵抗し続けた武蔵（坂東）武士の心意気を大いに示したと同時に、寄せ手の総司令官だった石田三成の評価に影を落とすことになりました。武将としての三成の評価には、この忍城水攻めの失敗が必ずといってよいほどついて回るようになったのです。

今回は、『のぼうの城』の主役である成田氏支配下の忍城と、攻め手の石田三成、そして忍城攻防戦に関連した人物についての資料を集めてみました。

■忍城：不落の浮き城

忍城は当時、「関東の七名城」の一つとして数えられていました。関東の七名城にはほかに、山城（やまじろ）として「金山城」「佐野唐沢山城」「太田城」、平城（ひらじろ）として「前橋城」「宇都宮城」「川越城」があげられ、特に忍城を含む平城の4城は江戸城の衛星的な役割を果たす城として、明治維新までその姿を留めることとなります。



忍城はまた、他の平城と比べても台地よりも平地に近い立地条件となっており、水田・沼・池などに取り囲まれたような島に似た姿から、「浮き城」とも称されていました。一般的な山城よりも厳しい防衛面を、灌漑用水を兼ねた水路や沼を活用することで天然の要害としていたわけで、こうした水との親和性から考えて、後の「水攻め」への耐性はもとより高かったと言えるのかもしれませんが。（大澤俊吉『忍城物語』では、かつて上杉謙信も忍城の水攻めを考えたが、軍師の宇佐美駿河守定勝の意見により思いとどまったという逸話が紹介されています。）

忍城は最終的に1か月余りに及ぶ攻防戦を耐え、主城である小田原城が降伏した後、1590年（天正18）年7月14日、成田氏から豊臣方の武将に明け渡されました。これが事実上の関東地



方の戦国時代の終焉とされています。しかし、降伏に至った際にも忍城内の士気は高く、豊臣方が「一騎一駄」（城外への財産持ち出し禁止）を条件に加えようとしたことに城内大いに怒り、危うく再戦という危機になってあわてて条件が取り下げられたという逸話が残されています。

■石田三成：愚将？智将？

石田三成（1560（永禄3）－1600（慶長5））は、天下分け目の関ヶ原の戦いで西軍を率いながらわずか1日で敗北したエピソードが最も知られています。その他にも、「秀吉の腰巾着」「淀君と密通」「千利休を死に追いやった張本人」など、さまざまなありがたくない評判を得ていますが、その一つに「戦下手（いくさべた）」というものもありました。この戦下手を示す例として「関ヶ原」と並んでよく紹介されたのが、「忍城の水攻め」です。守り手に十倍する寄せ手を以て臨みながら小田原の支城ごときを攻めあぐね、おまけに秀吉の水攻めを真似て失敗したやつ。武功で鳴らした諸侯にとっては、三成は侮蔑の的であったかも知れません。



しかし、実際の三成像はこうした「佞臣」「奸臣」「愚将」といった評価とはかなり異なっているのではないかということが、最近の研究でわかってきています。三成の悪評のほとんどは、関ヶ原の勝者である徳川方によって後世に伝えられてきたもので、実際の三成は、実務に優れ、秀吉への忠義に篤く、かといって媚びはしないとい忠臣であったのではないかとされています。

戦下手を代表するエピソードとしての「忍城水攻め」についても、最近の研究では三成が望んだ戦法ではなかったという説が有力です。三成自身がともに忍城攻めに当たった浅野長吉（長政）に宛てた書簡では、明らかに水攻めよりも力押しをめざしたい旨が記されています。また、水攻め自体が秀吉による指示で、その目的は忍城の陥落というよりも、秀吉の威勢を天下に示すパフォーマンスだったのではないかという説が出ています。

敵側である徳川光圀すら、「石田治部少輔三成は、悪（にく）からざるもの也。人各々その主の為にすど云ふ義にて、心を立て物事を行ふもの。かたき成とて悪むべからず。君臣共に、よく心得べき事也」（『桃源遺事』）と認めていた石田三成。その三成を以てしても落城に追い込めなかった忍城は、やはりさすがの名城と言うべきなのでしょう。



三成の旗印「大一大万大吉」

「天下のもと一人が万人のために、万人が一人のために命をそそげば、人々の生は吉となり、太平の世が訪れる。」
という願いが込められている。

（「大一大万大吉」の旗を揚げ、乱世を私心なく生きた男 童門冬二／著 『歴史街道』2010.9）

■忍の姫武者：甲斐姫

『のぼうの城』に登場した、忍城籠城戦にかかわった成田家中の人々には、魅力ある人物が多数います。その中から、今回は、武芸に優れた美女・甲斐姫をご紹介します。

忍城主成田氏長には嫡男がありませんでした。しかし、長女・甲斐姫は東国随一の美女で、兵法・武芸にも優れ、もし男に生まれていたら天下に名をなし家を興す器だったろうと噂されたほどでした。『のぼうの城』では、侍大将である正木丹波守を投げ飛ばすほどの武刃者（ぶへんしゃ）として描かれています。また、氏長が小田原に出立する際には、はやる気持ちで無謀なことをしないよう甲斐姫に言い含めたほどだったといえます（『成田記』）。甲斐姫の祖母も籠城戦で名をはせるなど、女性が武力に優れた家系だったようです。

甲斐姫は自ら鎧兜を身に付け兵を率いて討って出、三成軍を翻弄したとされます。中でも圧巻なのは、寄せ手の猛攻に持田口の城門が突破されそうになった時の話。甲斐姫が大將として本丸から援軍に駆け付けると、大將が女性であると気付いた敵の将・三宅高繁が前に立ちふさがり、生け捕りにして自分の妻とする、と言いながら対峙しました。すると甲斐姫は無造作にその将を一矢で討ち取り、寄せ手の侵入を阻止したといえます。これによって城兵の士気はますます上がりました。



開城後、成田一族は蒲生氏郷に預けられ、氏長は支城岩代福井城に入りました。ところが家臣の反乱にあい、家族を人質に城を占拠されてしまいます。氏郷のもとにあった甲斐姫は自ら福井城に赴きこれを鎮圧したと言われています。

こうした勇猛な美女の存在は、豊臣秀吉の着目するところとなり、甲斐姫は秀吉の側室に迎えられました。武勇にあふれた甲斐姫は数多い側室の中でも特殊な存在でした。豊臣家滅亡の際には、千姫のとりなしで死を免れ、大阪城から脱出し、鎌倉の東慶寺に入って尼となりました。一説によると、豊臣秀頼の娘・奈阿の教育係となっており、一緒に東慶寺に移りましたが、奈阿をねらった暗殺者は甲斐姫がいたため手が出せなかったといえます。

■ より詳しく知りたい方へ ～県立熊谷図書館にある今回の展示資料～

※『書名(：副題(シリーズ名))』著者 出版者 出版年【県立図書館の請求記号】

※以下に掲載した資料は、県立熊谷図書館2階ロビーで11月25日まで展示中です。

*印の資料は、館内利用のみとなります。(館外貸出はできません。)

(忍城の今昔)

- ・『埼玉の城址30選：歴史ロマン』西野博道／編著 埼玉新聞社 2005.6【BM291/サイ/】
- ・『城と隠物(かくしもの)の戦国誌(朝日選書 861)』藤木久志／著 朝日新聞出版 2009.12
【210.47/シロ/】
- ・『忍城史跡碑：六十六基金石文集 写真と案内』大沢俊吉／著 国書刊行会 1986.2【213.4/オ/】
- ・『埼玉の館城跡』埼玉県教育委員会／編 国書刊行会 1987.1【213.4/サ/】
- ・『埼玉の古城址』中田正光／著 有峰書店新社 1983.12【213.4/サ/】
- ・『徳川三代と忍藩：第23回企画展』行田市郷土博物館／編 行田市郷土博物館 2009.1【S205/トク/】
- ・『忍』大井誠之助／著 大沢龍次郎商店 1928.3【S261/オ/】
- ・『忍城ものがたり』大沢俊吉／著 行田市郷土文化会 1971【S261/オ/】
- ・『目でみる行田史忍城物語』大沢俊吉／著 行田市 1973【S261/オ/】
- ・『行田・忍城と町まちの歴史』大沢俊吉／著 聚海書林 1983.11【S261/ギ/】
- ・『行田史跡物語：忍城史跡碑五十基案内』大沢俊吉／著 歴史図書社 1979.12【S261/ギ/】
- ・『行田市郷土博物館研究報告 第3集』行田市郷土博物館 1995.3【S261/ギ/】
- ・『埼玉の城址30選：歴史ロマン 続』西野博道／編著 埼玉新聞社 2008.2【S290.2/サイ/2】
- ・『関東百城 改訂増補』大多和晃紀／著 有峰書店 1977【R213/オ/】*
- ・『忍城址出土青石塔婆拓本』 1948【アS261/オ/】*
- ・『忍城図 明治6年調製』古市直之進／[作] 埼玉公論社 1935【アS261/フ/】*

(石田三成を知る)

- ・『戦国の秘話(セイブンブックス)』桑田忠親／著 聖文社 1978.12【BM281/セ/】
- ・『奈良本辰也選集 4 心ぞ翔ばん』奈良本辰也／著 思文閣出版 1982.5【081/ナ/4】
- ・『石田三成：長編歴史小説(改訂新版)』徳永真一郎／著 青樹社 1991.1【BM/ト/】
- ・『歴史の群像 1 変革』集英社 1984.11【BM281/レ/】
- ・『石田三成のすべて』安藤英男／編 新人物往来社 1985.3【BM289/イ/】

- ・『堂々日本史 第2巻』NHK取材班／編 KTC中央出版 1996.12【210.04/トウ/2】
- ・『戦国史談』桑田忠親／著 潮出版社 1980.12【210.47/ク/】
- ・『歪められた歴史:石田三成と関ヶ原戦』田中巖／著 明玄書房 1967【210.49/タ/】
- ・『日本史探訪 第12集』海音寺潮五郎／〔ほか〕著 角川書店 1974.9【281/ニ/】
- ・『石田三成(人物叢書 74)』今井林太郎／著 吉川弘文館 1981.1【289/イ/】
- ・『石田三成(人物叢書 新装版)』今井林太郎／著 吉川弘文館 1988.12【289/イ/】
- ・『稿本石田三成』渡辺世祐／著 雄山閣 1929【289.1/172/】
- ・『石田三成』安藤英男／著 新人物往来社 1975【289.1/イ/】
- ・『石田三成の生涯』白川亨／著 新人物往来社 1995.1【289.1/イ/】
- ・『石田三成とその一族』白川亨／著 新人物往来社 1997.12【289.1/イシ030/】
- ・『石田三成:秀吉を支えた知の参謀 没後四百年特別展覧会』市立長浜城歴史博物館／編 市立長浜城歴史博物館 1999.1【289.1/イシ030/1】
- ・『石田三成:戦国を疾走した秀吉奉行 特別展覧会 第2章』市立長浜城歴史博物館／編 市立長浜城歴史博物館 2000.1【289.1/イシ030/2】
- ・『別冊宝島 1632 悲劇の智将 石田三成』JICC出版局 2009.7【熊谷雑誌】

(忍城攻防戦・水攻めと成田氏について)

- ・『小田原編年録 第3冊 北条氏政・氏直』間宮士信／編著 名著出版 1975【210.4/Ma42/3】
- ・『小田原北条記 下(原本現代訳24)』江西逸志子／原著 教育社 1980.11【210.4/コ/2】
- ・『日本戦史[3]小田原役』参謀本部／編 村田書店 1977【210.49/ニ/3】
- ・『新編物語藩史 第3巻』新人物往来社 1976【210.5/シ/】
- ・『物語藩史 第二期 第2巻 関東の諸藩』児玉幸多, 北島正元／編 人物往来社 1966
【210.5/モ/2-2】
- ・『備中高松城の水攻め(岡山文庫 184)』市川俊介／著 日本文教出版 1996.11【B217.5/ビ/】
- ・『研究紀要 第6号』埼玉県立桶川高等学校 1991.3【S050/ケ/】
- ・『忍城甲斐姫物語』行田青年会議所広報委員会／編 行田青年会議所 1995.1【S261/オ/】
- ・『忍成田侍分限帳:付録・武蔵成田氏について』田口新吉／編著 [田口新吉] 1997.11【S288.3/オシ/】
- ・『成田記』小沼十五郎保道／著 大沢俊吉／訳・解説 歴史図書社 1980.7【S288.3/ナ/】
- ・『天正記(和装本)』〔書写者不明〕〔書写者不明〕〔書写年不明〕【アS210.47/テ/】*
- ・『新修忍の行田』石島儀助／著 行田時報社 1927【アS296.1/イ/】*
- ・『成田記』小沼保道／〔編述〕石島儀助／編 今津健之助 1940.12【イS288.2/コ/】*



埼玉県のマスコット コパン

【関連団体・webサイトのご紹介】

- ・行田市郷土博物館：<http://www.city.gyoda.lg.jp/kyoiku/iinkai/sisetu/hakubutukan.html>

※上記以外にも、県立図書館では忍城に関する資料を所蔵しております。お探しの資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。



講演会のお知らせ

演題 『忍城水攻めと戦国武蔵の終焉～成田氏と石田三成の動向を中心に～』

講師 新井 浩文氏 (県立文書館史料編さん担当 主任学芸員)

期日 平成22年10月30日(土) 14:00～16:00 (開場・受付 13:30)

場所 県立熊谷図書館集会室

参加対象 中学生以上の一般県民 (定員50人)

参加受付 10月1日(水)から当館カウンター及び電話・FAX・電子申請で先着順受付 (定員になり次第締め切り)